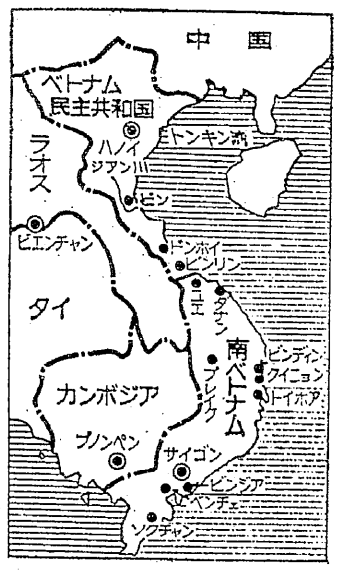
不法なベトナム爆撃

世界にまき起るアメリカへの抗議



不法なアメリカ

アメリカは二月七日につづけて八日、一一日にも北ベトナムに不法爆撃を加えましたが、この野蛮な侵略行為にたいして、アメリカ国民をふくめ世界各国からはげしい抗議と怒りの声がおこり、各国で抗議集会が行われニューヨークでも抗議のデモが決行されました。

日本でも二月一五日に総評が、二三日、二五日に抗議行動をおこなうように指示しました。

周知のようにアメリカは、民族独立をねがう南ベトナム人民武装部隊の前にあいつぐ軍事的な敗北をなめ、その支配地域でも反米デモにさらされ、サイゴンのかいらい政権が自壊作用を深めるという破局に追いこまれていますが、アメリカは戦争拡大によって危機を打開しようとあせっているのです。

しかしこの天人ともに許せない不法な侵略と挑発は、勇敢な抵抗と国際世論の前にアメリカと南ベトナムかいらい政府軍はいっそうの窮地に追いこまれることはあきらかです。

あせるアメリカ

アメリカ政府は「ベトコン（実際には、南ベトナム人民武装部隊だ）が七日未明プレイクの米軍キャンプに攻撃を加えた。これは北ベトナムの指令、援助によるものであることが確認されたから報復したまで」といっています。しかしこれはあらゆる意味で不法な戦乱拡大でしかありません。

アメリカの北進計画は①軍事的には北ベトナムからベトコン勢力に補給される人員、武器類、通信機械に損害を与える。②政治的には北ベトナムのベトコン援助を手びかえさせる。③心理的には南ベトナムの敗北的空気を減少させ、アメリカ依存をとりとめる。という三点をねらっているのです。

昨年一一月二三日発行されたアメリカの週刊誌「ライフ」はテーラー駐南ベトナム大使、ジョンソン次席大使ら現地高官と記者団とのインタビュー記事を発表しているが、このインタビューのなかでテーラー大使は「北ベトナムにおける共産側基地に攻撃を加えることは対ベトコン作戦に有利になる」と発言している。

こうしたねらいの〝北進〟戦略拡大の背景は、もちろん南ベトナム情勢がますます悪化し、アメリカが進退きわまっていることにある。グエン・カーン政権が倒れ、名前だけの民政移管が行なわれ、チャン・バンホオン政権が生れたが、同政権もまた学生、仏教徒の反政府デモに直面して大いに揺らぎ、再び戒厳令を布告せねばならなかった。だから、情勢の悪化にアメリカのあせりはますますつのり、危険な戦争拡大によって、危機の打開を図ろうとしている。しかしアメリカ政府と支配層が戦争拡大の方向で南ベトナムでの危機脱出をはかっていることは、ベトナム人民の戦う体制をいっそうかためつつあります。

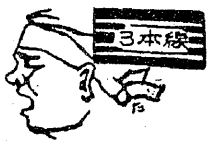
二月一三日朝日新聞で秦外報部長でさえ「……このままで進むと、ベトナム問題はアジア、ひいては世界の平和をおびやかし、われわれ日本人の生活にも重大な影響をもたらす恐れさえある」といっているが、われわれにとってベトナム問題は対岸の火ではなく、平和か戦争か、という重大な岐路ともなりかねないのです。

資本が、労働者を分裂させるのも、国際的な帝国主義が民族を分裂させるのも、全く同じ意図、すなわち「資本主義体制を守り」「搾取だけを強行する」ということにつきるわけです。

不法な分裂・合理化強行に抵抗するわれわれは、民族の自主権と幸福を追求する果敢な「独立と統一のたたかい」に、だれよりも大きい共感をもつことは当然であり、ここに日本独占の対米追従の誤まりと「危険」を強く指摘し、アメリカの侵略行為に心から抗議するものです。

だまっていてはよくならん

三川支部　井上伊喜太さん



私は昭和一九年入社になってますが、三カ月位やめたからで、それ以前昭和一二年に入社して万田坑にいました。万田坑は特に封建的で転制の権限はたいしたもんでしたそれがよくなったのは二八年の斗争以降ですね。今も差別される、差別されるといいますが、昔にくらべると自由があるし、第一ひけめを感じなくてすみます。それにどっちにしろ今より悪くはならんだろうし、それならいいたいことがいえるうえさをぶらさげられると、社宅などに入っておれるからということで落ちるようですしかし私はそんな会社のやり方がすかんですね。

坑内も今の状況ならまた爆発が起らんともかぎりません第二組合も昔坑内でやられていたように、弁当時間も休まずごはんも現場でたべてすぐ仕事しています。それで不満は大きく、三川の二五昇部内の第二組合甲方採炭金員、この間の九日に一時間四〇分座り込みをしてました。だから第二組合にしても思っていることは同じだと思います。

それに第二の内部でも、転制にごますっていいところに繰込まれるとか、いろいろ差別があってます。これは今の世の中では当り前のことです私はやっぱり第二組合のようにだまっていてはいつまでも良くならんと思います。

（内運　五四才）

その後の被災者の実態

第二回医療調査団の検診実施

会社側や一部マス・コミの宣伝によれば「患者たちは快方にむかい相当数の人が退院して出勤できるようになったため、出炭がよくなった」と宣伝していますが、事実は現在七五一名の患者をかぞえ症度別にみても一症度（八名）、二症度（三四名）、三症度（一二七名）、四症度（三〇一名）、五症度（二八〇名）となり、いっこうによくなっていません。

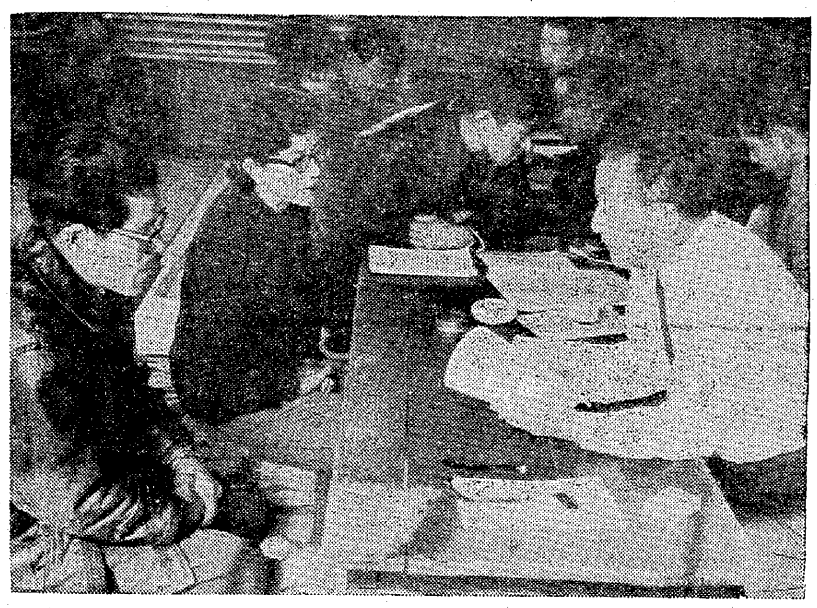
治療についても、通院患者の大部分が三井病院に治療をうけているものの、精神科などの専門医をやとっていませんし、大学病院派遣の医師も昨年六月以降は引きあげてしまい、放任状態です。

そこで三池労組は政府・三井鉱山に対して、現在までやっと三回にわたって健康診断を実施させることに成功させましたが、その内容は公表しようとしません。

そこで、このような形式的・秘密主義的健康診断では安心できないので、組合では自主的な健康診断・検査を民医連・新医協の医師の協力のもとに昨年八月にひきつづき、通院患者を対象に一月一五日から一八日まで第二回目の調査を行いました結果、通院患者一七〇名中転場復帰が将来できると思われる人は四四名で、一二六名の人は転場復帰があやぶまれる状況となっています。（但し三池労組関係分のみ）

第二回検診の結果を二月一三・一四・一五日の三日間、三川支部において、本人と家族に個人面接を行って、こんどの診療指導を行いました。

以上の実態から、こんど社会的に大きくとりあげて政府に「特別立法」をはじめ、会社に対する要求をかちとるために、被災者を中心にさらに斗いを拡げる。



【写真㊤は、検診結果を本人と家族に個人面接指導】

私の書棚

学ぶことの自信について

「経済学入門」

宮浦支部　山本行満

私が鉱山学校卒業と同時に入社したのは、三三年春のことである。当時の私の組合に対する認識はといえば、ほとんどゼロにちかかった。しかし行動隊役員の方はより直接的であり、組合よりコワかった。だから行動隊としての動員・学習会には、たびたび参加した記憶がある。

この行動隊の学習会で初めて、働くものの立場にたって価値だの利潤だのといっても、当時の私にとってまるでわかるはずもない経済学を学ばされたわけである。

しかし学ぶことを真剣に考えるようになったのは、私の政転斗争上京に対する懲条件個所への差別配役・賃金の分割払い・期末手当の棚上げなど、会社の差別政策と賃金切り下げという直接の利害関係からであった。

したがって私の学歴は、いま四年生だと思っている。この四年間読書と学習会に参加することで一生懸命学んだ。その中で、経済学は組合運動をすすめるうえで特に必要であるということを、自然と理解するようになった。

そこで「資本論」を読んでみたが、まったくわからないのでやめた。その他マルクスのものを読んだり学習会できいたりしたが、言葉の意味がすこし理解できる程度で、ほかのことまではわからなかった。

わからないから、経済学を学びたいという希望も情熱もさめて、もっぱら月刊「社会主義」を中心に現代労働運動に関するものを読みだしたが、やはり経済学の必要性はますます感じられ、なやみは消えない。

しかし、この「経済学入門」を読んでみて「いままでの苦悩は、もう一度やりなおせば克服できるかもしれない」という喜びに変った。それはこの「入門」が、こんにちの社会の全体的なしくみを、歴史を通してガッチリ頭のなかにたたきこみ、科学的な経済学が労働者階級のこよない武器となることを理解させてくれたからだ。

経済、つまり人間生活の体制的な見方や考え方が理解できていなかったため、古典を読んでも学習会に参加してもスッキリしなかったのだ。

運動の発展には「実践のなかで現状を正しく認識し、現実を変革するために、いかに理論的な実践が必要であるか」ということも知った。

こんど私は、このことを基礎にマルクス経済学を学び、実践のなかで自分をきたえたい。

「経済学入門」＝著・小島恒久▽労大新書／6＝価・二二〇円

＝詩＝ ほのほよりもあつく

細川汀（関西大学助教授）

そこに一本の木がある
木のつらなりがある
無数の木のひろがりがある

冷たい風が窓ガラスをゆるがし
電線はうなり声をあげ
遠い彼には白くかがやくものさえ見えるが
氷のかたまりのような雲のとぎれから
冬の陽ざしがさしこんでくる

ふる霜のあつさに
いためつけられた芽がふき出るように
くじけない　たおされない

ながいたたかいの日々のように
あなたたちがとおくあるいてきて
さらにつづくみちのむこうに

そこに一本の木がある
木のつらなりがある
無数の木々のさわぎがある
どよめきがある

ほほにながれおちる
雨のしずくをぬぐい
風にそよぐくろいかみを
まっすぐみつめる
つぶらな目の向うに

春うとおくない
みどりに包まれた
三池の山よ

▼この詩は、医療調査団と池にみえて、検診後に書ものです。